

# 東ティモールニュース

EAST TIMOR NEWS No.4

2001年10月21日

前号で、離任をお知らせした前任者川口みどりさんとは、南アフリカ共和国に囲まれたレソト王国に、一緒に旅をしたことがあります。その国に、共通の友人である浜野敏子さんという方が居られたことがきっかけでした。ここ東ティモールと似て、山並みに多くの人が住んでいる国でした。住居は、石作り、移動は、馬。寒い国ですから、カシミヤの毛布をマントのようにさらりと掛けて馬に乗って移動していました。その馬は、日本の在来馬（例えば、野間馬）とそっくりです。東ティモールでもそれに似た小型の馬がそこかしこにいます。わざわざ化石燃料を必要とする自動車やオートバイ等不要ではないかと思う位沢山居ります。馬、宇摩、(蘇我)馬子、美味い。一つのトータルともなりましょう。歴史を感ずる国なのに、何故是ほど弄ばれて来たのでしょうか。



ちなみに、かの浜野さんは、現在お隣のインドネシアに居られるそうです。地球というのは、広い様で、狭いですね。

レソト王国は、「遠い夜明け」という映画で有名になりました。スティーブ・ビコは、貶めた相手を憎むのではなく、自分の存在に誇りを持つと言いつづけました。「Black is beautiful!」。私も、黒い色の服が好きで、いつもそれを着ています。汚れが目立たなく、洗濯をあまりしなくても済むからです。更に、水浴びも嫌いです。肌が垢(赤)で黒く成るように。なんだ、それじゃあ「Red is beautiful!」?

「天使の声」が、毎朝 5 時に聞こえます。「天使の声」とは、カトリック教会が毎朝奏でる鐘の音です。二色の鐘の音が唱和して、何とも言えない響きを奏でます。すると、それに答えるように、お犬様達が四方八方から合いの手を入れます。「わおわおわお〜ん」と。この時、教会内では、御ミサが始まります。正にレゾナンスです。音の共振が、心の共振を導くのです。私は、鐘楼の音と、犬の遠吠えと、お祈りが同じくして成されることに、ここ東ティモールにて、且つ又 51 歳にして初めて体験しました。感謝です。とは言え、私は、仏教徒ですが。

10月に入り、いよいよ雨が降り始めました。ここの人々は、今年は、Tinan Fetu (女性の年) と言っています。そんな年は、雨季が早く来るそうです。私は、雨が大好きです。例え水浴びが嫌いであっても、身体中がびしょ濡れになる快感は、何物にも代えがたいものです。それは、何もエントロピーが地球から排出される結果である事を、感知しているわけではありません。単純に気持ちが良いのです。エントロピーといえば、ここには、粗大ゴミがありません。殆どは、微生物が食べられる有機物です。経済成長率ゼロ程、共生の時代を実感させられるものは、有りません。

昔、明治時代だったか、大正時代に、寺田寅彦という人が、湯飲茶椀に淹れたお茶を利用して、エントロピーを説明しました。茶椀の中では、対流が起きており、茶椀の上では、湯気が立ち昇っている。

「孤立を恐れて、連帯を求めず。」とは、30 数年前の標語です。身体的・精神的自己の絶対的孤独性を認識した上で、他者との、社会的・心理的連関性をも認識するという意味にでもなるのでしょうか。私は、この小さな島国であり、輸出すべき物も殆ど無い東ティモールが独立を選ぶということは、所謂資本主義経済におけるグローバル・スタンダードから、蚊帳の外に置かれても構わないという意識が働いたのではないかと考えざるを得ない感覚に浸っています。「Inter-dependence」とは、英語になら

ない英語ですが、私が大昔に米国を訪問した時に、米国人自身から教わった言葉の一つです。今、此処に住まわせて戴いて、新たな気持ちで、この段落で「」に括られた、二つであり、一つの単語を味わわせて頂いています。

またまた、エルメラ県のファトゥボロという所にある、保健所支所を修理して再開することになりました。そこで、首都にて資材を買い、現地に運びました。ところが、途中の橋が壊れていて、大迂回をすることになりました。通常の道路距離なら、5 Km 位の道程を、行きに一時間半、帰りに二時間半かかりました。何と、この間、全てが珈琲林だったのです。四国（前に、東帝文の広さを四国位と例えましたので、再び四国を引き合いに出します。）で言えば、香川県位の広さが全て珈琲林です。他県でも珈琲林を持っていますから、合計では、どの位広いのでしょうか。兎に角、朝8時頃、エルメラを出てディリに行きファトゥボロを巡り、エルメラに帰り着いたのは、夜10時近くになっていました。同行した看護師さんや運転手さんは、それでも元気なもんでした。こうやって、人知れず一人一人の力で一つの地域のシステムが作られて行くんだな～、という実感を持ちました。

ところで、この珈琲の生豆の価格が、10月になり、1 Kg 当り 35 US セント（9月までは、50 セント）に下落したそうです。世界経済に振り回されております。

エルメラ県の中心となる保健所を運営していた大きな国際協力団体（ポルトガル NGO）が、9月末を以って撤退することになり、たちまち救急車が無くなりました。重篤患者さんをディリの中央病院に送ることが出来なくなりました。何とか奔走し、SHARE（国際保健協力市民の会）が JICA（日本の「国際協力事業団」の略称）と協力して、購入し貸与することが出来ました。この車の任務には、各郡への薬の搬送や、村へ出かけての予防接種実施もあります。こんなことのシステムもまだまだです。日本との格差は、如何ばかりか。車を貸与しても、現地の県保健局には、燃料費の予算がありません。SHARE が協力します。読者の皆さんの協力こそ大歓迎です。ちなみに、千円あれば一人の一週間分の食費以上になる位の物価だと思って下さい。

丁字（クローブ）という名の香料の存在が、被植民地化された一つの理由ですが、地元の人には、これを煎じてマラリアの薬とするそうです。フトモモ科（人類にもある科？）の植物です。黄色の染料にも使います。高木ですが、沈丁花に似ています。偶蹄類ウシ目シカ科のことを、Bibi と呼びます。Bibi-rusa = 鹿が居ます。ビビっている兎と覚えましょう。ピョンピョン跳んで逃げるからです。山羊(Bibi-timur)、羊(Bibi-malae)もここに含まれます。（最近の研究では、鯨も偶蹄類らしいですね。）鹿は、数少なくなつたそうです。何かが増えると、何かが減ります。丁字が減ると、クロロキンが増える。人間が増えると、鹿が減る。風が吹けば、桶屋が儲かる。なんのこっちゃ。

縷紅荘主人  
高塚政生 記